

平成 28 年度学校評価に関する学校関係者評価

授業力の向上

- ・平成 26 年度以降、各学年担当の評価項目の自己評価が上昇傾向にある（全体の自己評価も昨年度より A とされている）。この点、学校側の報告では、生徒の実態・課題についての教員間の意見交換・情報共有が進み、効果的な学習指導が創りあげられていると感じ取ることができた。学校評価報告書での課題や改善策の記述も密度の濃いものになってきており、今後の展開が期待できる。授業力の向上に関する自己評価結果は適切であると考ええる。
- ・生徒への授業アンケートは年間二回実施され各教員の授業改善の努力がなされている様子が窺えるが、学習指導要領改訂に基づく新たな学習指導の確立を展望すると、授業評価アンケートを用いた教員間の協議などについて、今後一層の工夫を重ねてほしい。

全ての生徒の学力の向上

- ・時間割の改善、朝の学習、学力不振者への補充指導、面談など、きめ細かい取組が展開されている。
- ・朝の学習については、各学年からやや形骸化傾向の課題意識が示されている。学校関係者評価委員会としては、この機会を設定する本来の目的を教員組織において明確化され、それに照らして取組を省察する流れを確立していただきたいと考える。また、その前提として、小野高等学校で目指すべき生徒像（人間像）を校内で確立する（小野高校への進学を考える中学生や保護者にしっかりと伝えていく）ことが肝要と考える。
- ・商業科・国際経済科に関わる資格取得の項目については、ここ数年 D 評価が続いている。あえて高いレベルの成果指標を設定する学校側の意図は重く受け止めるものの、「評価を通じた改善」の実効化としては対外的な分かりづらさ是否定できない。成果指標に加えて行動指標も設定し、最終目標に向けた実践の進捗や課題を検証できるようにするなど、評価方法の一層の工夫が必要と考える。

進路実績の向上

- ・「授業力の向上」と同様に、進路実績の向上についても自己評価結果は上昇傾向にある。ここ数年、生徒の進路意識の向上や面談を通じた進路希望成就へ向けた支援、教員間の情報共有の精度が高まり、学校アンケートでもその効果が出ていることが窺えることから、全体の自己評価結果を A とした学校側の判断は適切と考える。
- ・新課程入試等今後の変化を見通した対応方策の構築（授業改善との関連を含む）については、来年度においてより踏み込んだ取組がなされることを期待する。

規律ある態度の育成

- ・生活三原則の徹底を軸にした生徒指導、部活動や学校行事における生徒の自主的な活動の促進がバランスよく展開され、生徒の実践の水準も高い。生徒指導に関する取組を A とした学校の自己評価結果は概ね適切と判断する。
- ・学校アンケート（生徒対象）においては、マナーアップの取組について学年間の意識のばらつきが窺える。その背景にあるものは何かが気にかかる。
- ・現在の小野高等学校の生徒は挨拶などきちんとしてくれるが、心のこもった挨拶や、校外でも自律的な態度行動ができるという次元での高まりを期待したい。生徒の多様化が進展し学校としての生徒指導の難しさに直面していることが推測できるが、学校としての「生活三原則」指導の目線合わせを現時点でしっかりと図っていただきたい。

ボランティア体験の実施

- ・例年同様の活動が行われたようであるが、ここ数年学校の自己評価における「成果」「課題」「改善策等」の評価記述がやや固定化しているようにも感じられる。課題と認識した点について確かな手立てが講じられ、取組の発展（ボランティア活動の全校化の進展など）が図られることを期待する。兵庫県教育基本計画で提示されている高等学校段階でのふるさと貢献活動を通じた行動力の育成について、小野高等学校には範たるモデルを示してほしい。

人権教育の充実

- ・人権教育においても例年同様の取組が展開されているが、学校評価アンケート（生徒対象）の結果ではやや生徒の意識に消極化傾向が生じている可能性がある（本年度、学校アンケートの回答方法に変更が加えられ昨年度との単純比較はできないが）。この点については今後も注意深く検証・改善を重ねてほしい。

情報発信の手段と内容の充実

- ・各学科において教育活動の特色の広報が図られ、パンフレット、ウェブサイト、オープンハイスクール等の媒体・機会による積極的な発信が展開されている。自己評価結果をAとする学校の判断は適切と考える。
- ・学校関係者評価委員会での協議では、本校の通学エリアにおける中学校生徒数の減少傾向と共に私学志向の高まりについても報告され、学校側における生徒募集の課題意識が示された。小野高等学校の各学科では充実した取組が展開され、検証改善のサイクルも機能していることから、それらを通底する小野高等学校のアピールポイントをより明瞭に言語化し、地域に伝えることを期待したい。

教職員の意識の高揚

- ・昨年度に継続して、学習・生徒指導面での教員間の情報共有・協働が進展しており、学校側の努力を高く評価できる。
- ・昨年度の学校関係者評価コメントで指摘した学校評価の改善について、年間評価サイクルの見直し、学校アンケートの改善（設問見直しや結果提示方法の工夫）が図られている。学校評価項目とアンケート設問の関連づけ（各評価項目における指標設定の工夫）など、学校側で確認した課題について、来年度さらに改善を重ねてほしい。

地域との連携

- ・商業科・国際経済科の課題研究・インターンシップ（普通科生徒を含む）、科学総合コース「探究」に関わる高大連携など、小野高等学校ならではの水準の高い地域連携活動が展開され、生徒の力量育成に効果を上げている。自己評価結果Aは適切と考える。
- ・学科・コースの別を問わず、生徒に直接的な進学指導の枠を越えて、将来就く職業等をイメージさせながらの進路指導を充実していただきたい。そのような動きの中で、普通科生徒のインターンシップ参加の拡大なども図られていくことを期待したい。